

憩える場所づくりを通じた地域エンパワーメント事業

阪神淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション
(兵庫県神戸市)



神戸市長田区御蔵地区の震災前の路地裏

I. 団体の目的と経緯

神戸市長田区御蔵通5・6丁目地区（御蔵西地区）はケミカル産業、金属・機械産業を中心とした工場と、そこで働く工具のために供給された長屋住宅からなる住工混在地であった。被災前から若年層の流出による高齢化や、産業衰退の傾向がみられた典型的なインナーシティである。先の震災は老朽化した家屋の多くを倒壊させた。また、直後に発生した火災は同地区内を縦横無尽に駆け巡り、地区面積の8割を全焼に至らしめた。1995年3月17日、神戸市は複数地域で都市計画決定を行い、復興への方針を示す。御蔵通5・6丁目地区でも、震災復興都市計画事業による復興が「決定」された。震災からわずか2ヶ月、住まいを失った住民が様々な避難先へと離散し、被災した建物の瓦礫が未だ風雨にさらされる中での「決定」であった。この事業決定に対し、地区住民の有志は「役所にものをいう」ための新たな組織を立ち上げた。「御蔵通5・6丁目まちづくり協議会」（以下協議会）である。

震災でほとんどの住宅が全焼した同地区においては、住民の多くが避難所等に離散しており、協議会活動を円滑に進める人材の確保は困難であった。この手薄な協議会の要望により、地域で活動していた震災ボランティア2名が議事として参加することになる。旧来の地縁組織が老齢化のため機能せず、指導者層が世代交代したことにより、地元は部外者であるはずの「若者・よそ者」を受け入れるキャパシティを持つに至っていた。協議会の相談役および、この2名の若者を母体として、1996年4月に当団体まち・コミュニケーション（以下まち・コミ）が創設される。創設者である震災ボランティアの若者は、他のボランティアの多くが避難所における支援に目を向ける中、まちの復興が遅々として進まない状況に着眼した。それゆえ、協議会の事務的な支援からはじまった活動は、次第に地域内の交流の場づくりや、住宅再建支援等の実践的なプロジェクト（共同債権住宅「みくら5」の建設コーディネート等）に発展していく。

まち・コミは震災復興過程での経験と反省を活かし、御蔵地区的復興を支援し、ヒューマンスケールのまちづくりを全国に発信・提唱することを目的としている。専門家・学識者等からなる運営委員会と、学生ボランティア等、若者を主体とするスタッフの連携によって震災以降9年間活動を継続している。ま

ちには若者の柔軟な考え方やエネルギーが供給され、若者にはまちの人によって活躍の場が与えられる。まちづくりの主役はあくまで住民である。しかしながら、まちの住民ではない「よそ者・若者」がまちにどこまでかかわるかをひとつのテーマとして、活動を継続していきたい。

II. 活動の内容



移築前の古民家

神戸市の計画した復興都市計画事業である土地区画整理事業が進むまちに、2001年の10月ごろ、行政からまちの集会所を再建することが提案された。当団体がワークショップ等のコーディネーターをつとめ、勉強会や他地域の集会所の見学会を重ねた結果、古民家移築による集会所の建設が決定された。民家は鉄鋼・ゴム産業の工場で働く地方出身者の多いこのまちの住民にとってふるさとを思い出す懐かしいものであった。また、震災後、ツーバイフォーのプレハブ住宅が多く再建されるなかで、せめて集会所くらいは震災前の長屋に似た、木の温かみをもったものにしようという声も聞かれた。まち・コミのもつネットワークにより、兵庫県の北の果て、香住町安木村に解体を予定された民家を見つけ出した。2002年の8月、地域住民や建築を専攻する学生ボランティア、総勢100名が安木村の体育館で2週間の合宿を行い、解体作業が進められた。実際に多くの人々がこの解体作業に従事し、参加者の間には連帯感が生まれる。そこで感じたことは、「この建物はすでに立派な集会所になっているのではないか」ということであった。

集会所の建設予定地は、神戸市都市計画局より賃貸されるはずであったが、その面積の件でもめにもめた。公平性の面から、一時明示された土地を縮小することが打診されたのである。悪いことに土地を縮小されると、建築基準法により解体してきた民家を元の姿で再現することは不可能となる。コーディネーターであるまち・コミや、地域のご婦人が当局に自分たちの想いを伝えに足しげく通った結果、2003年の4月にようやくはじめに示された面積の土地の賃貸契約を締結することができた。

建設工事の着工は大幅に遅れ、棟上式を行うことが出来るのは、7月以降となることが予想された。しかし、実際の建設工事への着工までにもしなければならないことは山ほどあった。まず、解体してきた民家は、壁土にいたるまですべて長田を持って帰ってきていた。基礎石を使ってプールを作り、その中に壁土、藁、水をいれ、左官屋さんの指導のもと、リサイクルできるように練る作業が行われた。実際に多くの住民がこの作業に従事することとなる。重労働であるうえ、非常に汚れる作業であったが、泥遊びの要領で子供も交えて楽しく行うことができた。また、民家の移築では、古材を100%利用できるわけではなく、さらに増築部分の木材も不足していた。そこで、まち・コミが解体工事に従事した学生ボランティアに呼びかけを行い、



壁土練りをしている様子

地域住民とともに1泊2日の合宿で山から木を切り出すという作業を行った。慣れないチェーンソーを用いた作業であったが、まち・コミスタッフの親戚の工務店の協力を得て、木の性質を学びながら行う作業となった。同様に木舞の材料となる竹も大量に切り出し、長田に持って帰った。

建設工事を進めるにあたり、解体作業したときと同様に、学生ボランティアの力を期待していた。そのため、解体作業時に活躍した大阪工業技術専門学校をはじめ、神戸大学、神戸山手大学といった近隣の大学に対してプレゼンテーションを行った。まち・コミと地域住民のリーダー層が、作業に参加することによって得られることや、自分たちの集会所への想いを語る。学生たちもそこから何かを感じてくれたようで、多くの若者が建設工事に参加することを約束してくれた。6月7日、初夏を感じさせる強い日差しの日に、安全祈願祭が行われた。これは地域住民や学生ボランティア、工務店、職人といった建設工事に従事する人々の団結式でもあった。式の最後には解体工事から続いて作業に参加してくれる大阪工業技術専門学校の学生の一人に「今ここに集っている人々の想いは、ひとつに繋がっている。集会所は新たな繋がりをつくる場。集会所の意義を踏まえ、参加します。そして、我々学生ボランティアに活躍の機会をあたえてくださった地域の皆さんに感謝しています」と宣誓をしてもらった。集会所建設に対する関係者の志気の高まりを感じた。式には地域のご婦人が作った豚汁等も振舞われ、住民と学生、学生同士の間に強いつながりをつくっていった。7月下旬にはついに棟上げが行われた。

建設現場の傍らで、あらかじめ切り出しておいた竹を木舞として利用するために割っていく作業も行われた。8月上旬には民家の壁の工事に取りかかることができた。この一連の壁工事が住民と学生からなる建設ボランティアの醍醐味である。地域住民、学生ボランティアに呼びかけを行い、職人の指導のもと、まずは竹木舞を編んでいく。職人の手元をみていると簡単に思えるのだが、やってみると非常に難しく時間がかかった。最近の木舞はビニールテープを使って編むらしいが、今回はできるだけ本物を使おうと言うことで、シュロ縄を用いたことも、作業を難しくした一要因かも知れない。若者にしてみれば木舞 자체はじめて触る代物で、縄を使って編むときの力のいれ具合もわからず、竹の感覚も狭くなりがちで、指が入りにくく辛い作業となった。

何とか編み終えた木舞に、次は土を塗って土壁とする。職人の指導のもと、2人がペアになって左官工事を進めていく。「この壁は私が塗ったって自慢できるわ」といった声が聴かれた。素人が塗った土壁はお世辞にも美しいとはいはず、場所によつては大きく波打っている部分もあったが、「これも愛嬌」としてそのまま残すことにした。「作業はお手伝いできないけど



安全祈願祭



木舞用の竹割り

といった住民の方から、菓子や茶などの差入れもあった。壁が塗られることで集会所としての形が見えてくるようになった。

作業が進められる一方で、木でできた民家の管理や集会所としての運営に関する勉強会が随時開催されている。これまで集会所建設に関する会議を続けていた集会所建設委員会から、集会所運営委員会が発足した。「囲炉裏を囲んでみんなでお酒を飲みたいね」「座禅の会をするのにぴったりじゃないか」「イスなしで座り続けるのはしんどいから板間には机をおこう」「鉄筋コンクリートの集会所とくらべて管理が大変なんじゃないか」「誰が運営主体となるのか」「運営資金の確保は可能なのか」・・・。楽しい話から重い話まで、様々なことがこの場で議論された。会議の場では建設作業の写真がスライドで紹介されたりもした。でき上がってしていく集会所を見るにつれ、完成後の使用のイメージが膨らんでいった。建設作業、勉強会を進めるうち、一つの懸念が生まれた。それは作業や会議に参加している住民が特化してきていることである。我々が考える以上に、住民の集会所の認知度は低いのかも知れなかった。作業や会議に参加して貰える住民を増やすために、10月中旬に地域住民向けの内覧会を開催した。2日間で45名の方が足を運ばれ、ある程度の声を聞くことができた。

12月に神戸大学から「学生に住民参加で作られる集会所建設の現場を見せたい」との打診がまち・コミにあった。1年生100名ほどを収容できる会議室を役所から借り、スライドを使って、民家移築による集会所建設が決定された過程を当団体のスタッフが説明し、住民のリーダーの一人である女性がその想いを語られた。その後、建設現場に移動し、実際に作業の様子を見せ、構造等の建築的な説明を行った。この見学会に参加した学生の中には、作業に参加してくれている学生がいた。彼は「現場で建築を知ること、人に会えること、体を動かして得る達成感」を同輩に伝えてくれた。彼もまた1年生であり、建築という学問をはじめたばかりである。建設現場に入り、コンクリートをうち、木舞を編んで土壁を塗る。これらの建設作業のプロセスに参加することで得たものは大きい。この見学会から新たに3名の学生が作業に参加してくれた。

翌2004年の1月17日、毎年恒例の慰靈法要と併せ、集会所の開所式が行われ、多数の人々が出席した。ここには、震災後他地区に移り住んでしまった方や、民家の元の持ち主を招待することもできた。「御蔵に戻ることはできないけど、気軽に立ち寄れる場所が出来た」「懐かしい私の家が皆さんのお憩いの場としてよみがえり、感動している」とそれぞれに喜んでいただくことができた。また、この開所式には奈良県明日香村の伝統芸能保存会をはじめ、毎回の夏祭りでお世話になっている河内音頭や、民家の故郷である香住町にほど近い但馬の民謡歌手を呼び、大々的なイベントとすることができた。



壁塗り



開所式の様子

その後も残った庭園づくりの作業が随時行われ、集会所の運営に関する勉強会も続けられている。集会所は2004年の2月より、地域の会合やふれあい喫茶の場として利用され始めた。現在は、住民や学生ボランティアのつながりによって生まれたこの集会所の建設の記録を後に残すための「記念誌・記録誌」の編集が進んでいる。



開所式の様子

III. 活動の成果

今回のプロジェクトは、集会所を建設するプロセスに、学生ボランティアや地域住民が自らかかわり、皆でともに汗を流すことで人と人との繋がりを強固にし、まちの活性化を目指すものであった。昔から民家というものには、地域の住民が総出で建てる文化があった。日本古来の共同体「結い」である。これを震災やその後の復興計画で住民が離散し、コミュニティがずたずたになってしまった長田のまちで再現する。それにより、被災直後の「震災ユートピア」と呼ばれた時代に存在した他人を思いやり、助け合う心の大切さを再認識し、震災から10年が経とうとする今、改めて住民同士の役割・存在を認めあい、被災地で滞りつつあるまちづくりの拠点とすることことができたと考える。

また、企画した勉強会や集会所の管理・運営に関する会議は、震災復興が一段落し、平常時のまちづくり活動へと移行するための訓練になった。震災以降、このまちには土地区画整理事業が施行されたこともあり、道路や公園、住宅などを「造る」まちづくりが進められてきた。しかしながら本当に必要なのは、こうしてできた新しいまちをうまく運営していくことである。集会所運営の検討を中心に、御蔵のまちづくりは、まちの管理・運営という新たなステップに移行している。

学生ボランティアにとっては、現場で「本物」に触れることではじめてわかる貴重な学習の場となった。建設作業を職人や住民と共にを行うことで、手を動かして汗をかくことでの造りの喜びや難しさを知ることができる。また、住民とふれあい、共に喜び、生活のことを聴き、個人史を知ることで、広い視点が生まれる。一芸に秀でた職人と仕事をすることで、仕事の厳しさを身をもって体験することができる。学生の中には、これを機に、職人の道を志した者までいる。左官の技に惚れ込み、左官に弟子入りした女の子もいれば、大工の棟梁への門を叩いた男の子もある。人と人がふれあえる場を持つことで多くの協調が共感を生み、生きる喜びを感じることができるのでないだろうか。問題は現場で発生する。机上で考えるものではなく、現場で実感を持って問題と対話し思考することで解決でき、人は成長するのではないかと考える。

しかしながら、解決できなかった課題も多々残る。参加住民の膠着化を問題点のひとつとしてあげたが、さまざまなイベン



工事に参加した神戸大学の学生たち

トの開催、再三の呼びかけにもかかわらず、ほとんどこれを打開することはできなかった。2月に行われた協議会・自治会の臨時総会では、この集会所の運営主体についてもめにもめた。「造っても管理することが大変なことははじめからわかっていた。私ははじめから建設に反対だった」このような声も聞かれた。我々が付き合っていたのはやはり顔の見えている住民だけだったということを再確認し、顔の見えにくい人たちの声を聞いた上で合意形成をはかっていくことの必要性を痛感している。



完成した集会所の外観

IV. 今後の取り組み

住民が主体的に建設のプロセスに参加する集会所は完成したが、これを地域資源、復興したまちの拠点として有効利用するための管理・運営方法の模索が必要である。幸いにも、新しく結成された集会所運営委員会には、地域住民に限らず、まち・コミのスタッフも数人が委員として参加することができた。建設時のコーディネーターをつとめたものとして責任をもってこの集会所の運営にかかわっていきたい。

2002年の香住町安木村における解体時、その新聞記事を見た人物から「うちのいなかの家も解体してほしい」という要請が数件あった。2004年5月の連休に、このうちの一軒、福井県大飯町の古民家の実測調査を新たに呼びかけた学生たちと行った。若者は学校では学べないリアルな体験のできる学習の場を求めている。もし、神戸のニーズとこの民家の解体をマッチングすることができたなら、再び移築作業を計画し、時と場所、人、文化をつなぐ現代版の「結い」を生み出したいと考えている。